

## 成人期抑うつ症状、うつ病発症に及ぼす虐め体験、神経症的傾向の多因子相互作用

井上 猛, 館脩一郎, 梶屋二郎

東京医科大学 精神医学分野

### 【研究の背景】

低養護や過干渉、虐待などの小児期の逆境的体験が、神経症的傾向などのパーソナリティ特性の変化を媒介因子とし、成人期以降のうつ症状やうつ病の有無に影響を及ぼす事が知られている。同様に、小児期に虐められた体験も成人期以降のうつ症状やうつ病発症に影響を与える。しかし、これらの小児期の逆境的体験がどのような機序によって成人期のうつ症状やうつ病発症に影響を与えるのかはまだ明らかではない(井上 2019)。これらの複雑な多因子の関係を解析するためには、心理学、社会学の解析で広く利用されている媒介効果を検討することが有用である。第 1 の因子が第 2 の因子への影響を介して第 3 の因子に影響するとき、第 2 の因子を媒介因子と呼び、媒介因子を介した間接効果を媒介効果と呼ぶ。

### 【目 的】

本研究では、健常者群とうつ病患者群において、小児期の虐められた体験(以下、虐め体験)が神経症的傾向を媒介因子として、成人期以降のうつ症状やうつ病の有無に影響を与えていると仮説を立て、パス解析によってそれを検証した。

### 【方 法】

うつ病患者のうち同意と有効回答が得られた 82 名と、健常者のうち、うつ病患者群と年齢性別をマッチさせた 350 名を対象とし、人口統計学的情報他の自記式質問紙による調査を行った。うつ症状を目的変数とし、小児期の虐め体験と神経症的傾向を説明変数とするパス図と、うつ病の有無を目的変数とし、小児期の虐め体験と神経症的傾向を説明変数とするパス図を作成し、パス係数を解析した。以下の質問紙を自記式質問紙に用いた。本研究は、東京医科大学及び北海道大学病院の倫理委員会の承認を得て実施した。

① PHQ-9 日本語版:4 件法 9 項目のうつ症状評価尺度(Muramatsu et al., 2007)

② EPQ(Eysenck Personality Questionnaire)-R 短縮版の neuroticism(神経症的傾向):辻らが作成した EPQ 日本語版(甲南女子大学研究紀要 26:59-80,1989)より EPQ 短縮版の neuroticism12 項目(Eysenck et al. 1985)を抽出した。はい、いいえの 2 件法で評価する。

③小児期の虐めの質問紙:国立教育政策研究所の、『いじめ・暴力防止に関する指導方法の在り方についての調査研究』いじめ調査質問紙を一部改変し、小児期に学校や地域の人々から虐められた体験を 5 項目 5 件法で調査した。

統計学的解析では、MPlus 8.0(Muthén & Muthén)を用いて共分散構造分析を行った。

### 【結 果】

うつ病群、健常者群をあわせた 432 人を対象として、現在のうつ症状を目的変数、年齢、小児期の虐め体験、神経症的傾向を説明変数としたパス解析を実施した。うつ病群、健常者群共に、小児期の虐め体験からうつ症状への直接効果は有意ではなかったが、神経症的傾向を介した間接効果は有意であった(標準化パス係数はそれぞれ 0.059, 0.141)。年齢からうつ症状への直接効果もうつ病群、健常者群共に有意ではなかったが、神経症的傾向を介した間接効果は健常群でのみ有

意であった(標準化パス係数はそれぞれ-0.065)。すなわち、小児期の虐め体験は成人期うつ症状を増強し、年齢は減弱していたが、小児期の虐めの効果は年齢とは独立であった。

次に、うつ病群、健常者群をあわせた 432 人を対象として、うつ病の有無を目的変数、年齢、小児期の虐め体験、神経症的傾向を説明変数としたパス解析を実施した。小児期の虐め体験からうつ病の有無への直接効果と神経症的傾向を介した間接効果は有意であった(標準化パス係数はそれぞれ 0.186、0.164)。一方、年齢からうつ病の有無への直接効果は有意であったが(0.182)、神経症的傾向を介した間接効果は有意でなかった。すなわち、小児期の虐め体験は成人期うつ病の有無と関連していたが、小児期の虐め体験の影響は年齢とは独立であった。

## 【考 察】

本研究では、小児期の虐め体験が神経症的傾向を高めることにより、成人期抑うつ症状を増強することを明らかにした。我々はこれまで、小児期に受けた虐待や不十分な養育体験が神経症的傾向への影響を介して、成人期の抑うつ症状に影響を与えることを、一般成人を対象とした研究で報告してきた(Ono Y et al., 2017; Ono K et al., 2017)。本研究の結果は小児期の虐め体験も、小児期虐待や不十分な養育体験と同様に、神経症的傾向への影響を介して成人期抑うつ症状やうつ病に間接的に関連していることを示した。また、虐めのうつ症状に対する間接効果が完全媒介であったこと、すなわち、虐め体験が神経症的傾向に対する効果のみを介してうつ症状に間接的にのみ影響していることは、虐め体験のうつ症状に対する効果において神経症的傾向が重要な役割をはたしていることを示唆している。

さらに、本研究の結果から、小児期の虐め体験が神経症的傾向を高めることにより、成人期のうつ病発症につながる可能性が示唆された。しかし、成人期抑うつ症状に対する影響とは異なり、小児期体験の虐め体験のうつ病有無に対する効果は完全媒介でなかったことから、神経症的傾向以外の因子が虐め体験の影響に関与していることが示唆される。今後、長期前方視的な研究により、神経症的傾向以外の媒介因子とともにうつ病発症に対する虐め体験の効果を検討する必要がある。

## 【臨床的意義・臨床への貢献度】

本研究は、小児期に虐められた体験の成人期抑うつ症状、うつ病の有無に対する影響において、パーソナリティ特性である神経症的傾向が媒介因子であることを示唆している。小児期に虐められた体験の抑うつ症状に対する効果における媒介作用を検討した研究はこれまでになく、本研究が虐め体験のうつ症状、うつ病に及ぼす影響の機序解明の糸口になることが期待される。

## 【参考・引用文献】

- 1) 井上 猛: 第 15 回日本うつ病学会総会会長講演「うつ病におけるパーソナリティとストレスの相互作用」, pp23-29, 日本うつ病学会 NEWS Vol.15 2018(発行 2019/6/28 日本うつ病学会、東京)
- 2) Ono Y et al: The influence of parental care and overprotection, neuroticism and adult stressful life events on depressive symptoms in the general adult population. J Affect Disord 217:66-72, 2017.
- 3) Ono K et al: Associations among depressive symptoms, childhood abuse, neuroticism, and adult stressful life events in the general adult population. Neuropsych. Dis. Treat. 13:477-482, 2017.